

第39回国際結核肺疾患連合会議 (2008年10月16日～20日, パリ) (International Union Against Tuberculosis and Lung Disease: IUATLD)に参加して

結核予防会国際部 西山 裕之

結核研究所国際協力部長 山田 紀男

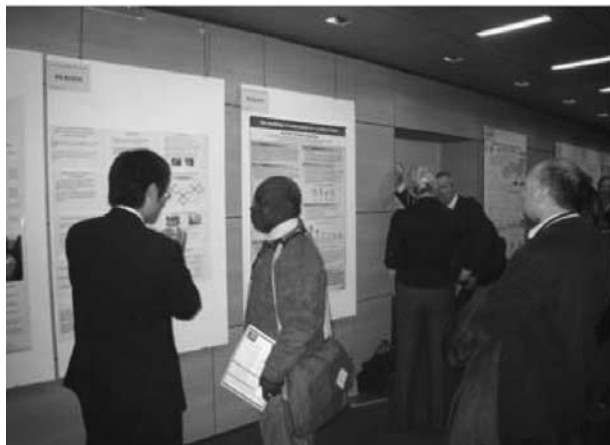
ヘルスシステムの強化と結核対策の促進

今回の会議のテーマは、“Global threat to lung health: the importance of health system responses”で、世界120カ国から約2,500人の結核対策に関わる人々が集まりました。初日のシンポジウムでは、上記テーマに従って結核対策の改善がヘルスシステム全体を強化し、またヘルスシステムを強化する事が、結核対策の促進につながるという事が強調されました。このメインテーマの他に、近年そうであったように、新しい結核診断、TB/HIV、多剤耐性結核が今回も主要な分野として挙げられます。また、胸部レントゲンに関するシンポジウムがあったことは特筆すべきことではないかと思えます。レントゲンは近年、HIV合併結核の診断や、結核実態調査の必要性から、以前よりも重要な役割を持ってきているにもかかわらず、特に途上国ではレントゲン写真の質に問題がある場合が多く、それを改善するための活動が行われています。そのひとつとして、長年に渡る結核予防会のレントゲン写真精度管理の経験に基づいて途上国向けの精度管理マニュアルが作成（USAIDの支援でTBCTAが作成）されています。このようなレントゲン検査の問題点と改善について、2007年12月まで結核研究所国際協力部長で現在WHO勤務の小野崎郁史先生が発表を行いました。本分野は、これまでの予防会の日本での経験を生かして貢献できる分野であると考えられます。一般演題（ポスター）発表

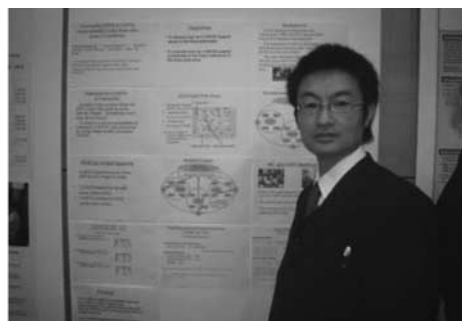
では、上述のレントゲンマニュアル作成の中心となった国際協力部岡田耕輔先生、臨床疫学部長伊藤邦彦先生、伊達卓二氏らの発表や本会が関与しているプロジェクトから、多くの発表がありました。西山は、カンボジアでのコミュニティDOTSについての発表でしたが、これからコミュニティDOTSを導入しようとする国（ボリビア）からの質問や、なぜこんなに治療成功率が高いのか（ジンバブエ）等様々な質問があり、プロジェクトの成果を紹介する良い機会となりました。

JICAと結核予防会の共催のシンポジウム

19日にはJICAと結核予防会の共催で行われたinternational symposium “More focus on Laboratory: what can the laboratory do for Stop TB Strategy”が開かれ、テーマに沿ってJICA支援の各国（アフガニスタン、インドネシア、パキスタン、ミャンマー、カンボジア）の活動報告が行われました。西山が赴任しているカンボジアからはウーン氏が発表しました（タイトル“Establishment of Culture Lab at Provincial Level - Experience in Battambang, Cambodia”）。会議室に入りきれない程の参加者があり、日本に対する各国の期待の高さを伺い知ることが出来ました。多剤耐性菌結核やHIV合併結核への対応のための検査機能の拡大が求められていますが、基本的な検査室機能の確立も重要であるということを確認する機会として意義があったと思われました。



ポスター報告の様様



ポスターの前で（写真は西山）

国際結核肺疾患連合会議報告

国際研修ネットワークの場としてのブース出展

2008年10月16～20日までの5日間、結核研究所・結核予防会（以下RIT/JATA）は昨年度に引き続き今年もブース展示を行いました。ブース展示では訪れる人々にRIT/JATAの研究や国際協力の活動を紹介します。今年の特徴は主に、1) 国際研修に関心をもたれた方が多くいた、2) ラボ（実験室）のテキストに関心が高く、18日にJICAと共同でおこなったシンポジウム“More Focus on LABORATORY よりラボの活動を焦点に”にも多くの方が集まった、3) 国際研修卒業生がブースに立ち寄り所属や連絡先など情報の更新ができた、といったことにありました。隣にはJICAブースも設置され、各国のプロジェクトや国際研修の活動について連携を取りながら日本の活動を伝えることができたと思います。

（結核予防会本部国際部 下谷 典代）



展示ブースでの様子

秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞授賞式

17日にはIUATLD総会にて、第11回秩父宮妃記念結核予防功労賞世界賞授賞式が行われました。本年はカナダ・アルバータ大学名誉教授のアン・ファニング博士が受賞されました。ファニング博士は長年、世界の結核対策に医師としての関わりだけでなく活動家として関わってこられました。授賞



喜びをかみしめるファニング博士（左は島尾顧問）

式では島尾顧問よりファニング博士のこれまでの活動が紹介され、IUATLD北米地域会長（2000-2003年）、IUATLDの会長（2003-2005年）など、国際的な重責を務められた功績を称えられました。これに対しファニング博士は、結核予防会のネパールでの地道な、しかし確実な活動に非常に感激したこと、これらの活動は先進国と途上国がともに手を携えることができた素晴らしい実例であることが述べられました。博士は公式には退職されていますが、世界賞受賞によって今後も結核対策に尽力されていく決意を新たにされていました。世界賞受賞賞金は母校アルバータ大学の人材育成プログラムへ寄付されており、1998年より始められた世界賞がますます広がりをもって世界の結核対策へ寄与していることを強く感じました。

（結核予防会本部国際部 大室 直子）

国際研修卒業生ネットワーク・ミーティング

19日には結核研究所の国際研修卒業生ネットワーク・ミーティングが行われ、およそ70名が参加しました。冒頭、加藤副所長の挨拶ではこの卒業生のネットワークが今後世界で結核対策を行う上で貴重なリソースであり重要なネットワークになっていくと、この会の意義を説明しました。また情報共有セッションでは、山田国際協力部長から本年7月に東京で行われた国際結核シンポジウムおよびその中で発表された「ストップ結核ジャパン・アクションプラン」の紹介を行いました。続いて各国代表から情報共有の発表が行われ、45周年を迎え世界97カ国2,000名を超える国際研修の歴史の重みを感じながら、世界の結核対策を進めていくためにもこの貴重なネットワークを強化していくことがますます必要であると改めて感じました。

（結核予防会本部国際部 業務課長 安藤 宣孝）



ネットワークミーティングの様子